



さがけ

題字：武田 双雲

第4回

ユアサ工機(株)

伸縮ポール、シリンダーなど
“丸くて長い”もので伸びる



「伸縮ポール」出荷前の検査



油圧シリンダー部品。内側の切削工程



油圧シリンダーの溶接工程

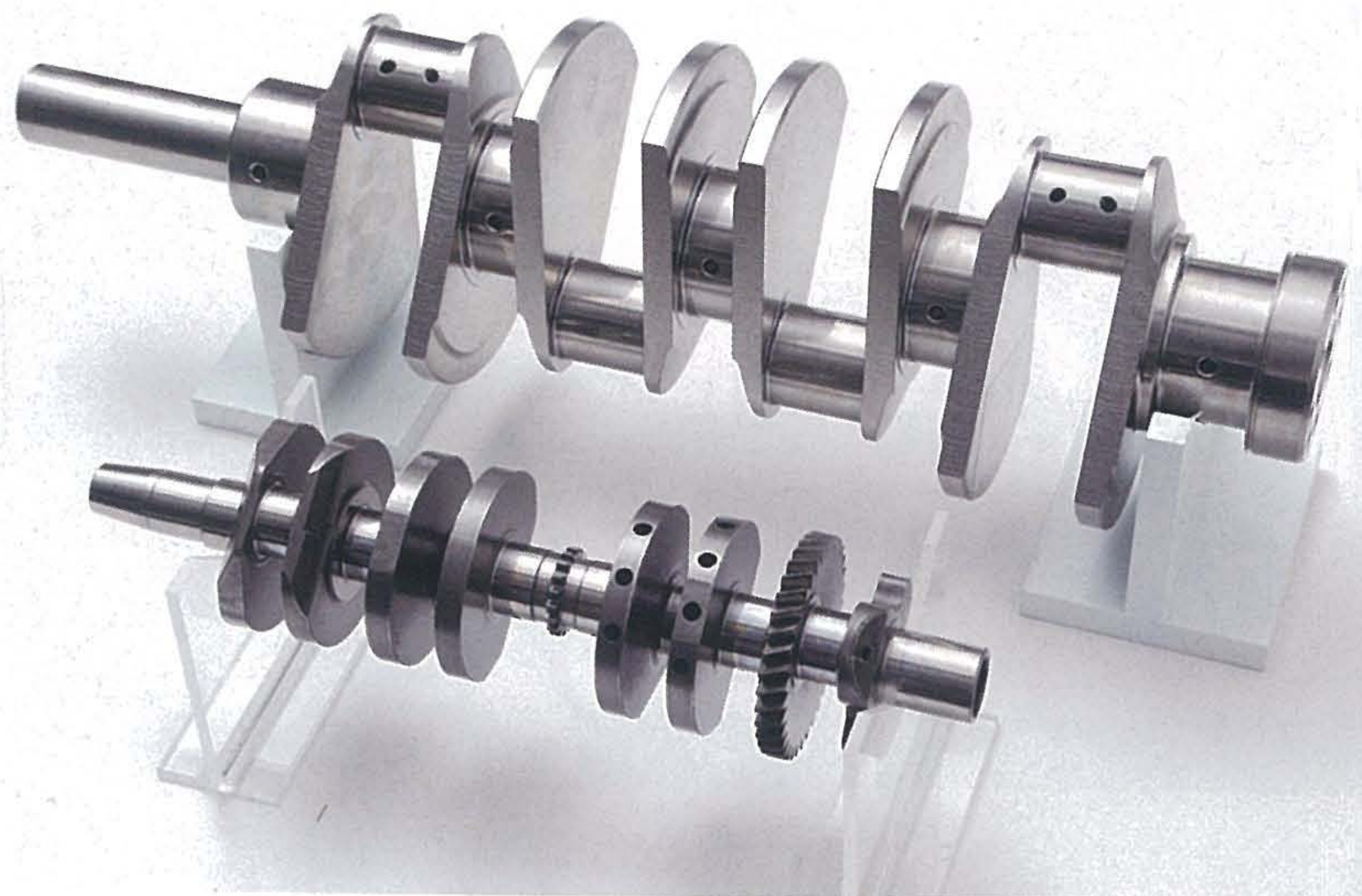


重機用油圧シリンダー

企業データ

ユアサエ機(株)

本 社	岡山市北区久米6		
T E L	086-241-2592	F A X	086-244-3146
H P	http://www.yuasakk.co.jp/		
創 立	1947(昭和22)年		
資本金	9200万円		
年 商	34億円(2016年9月期)		
従業員	176名(2016年9月)		



主力製品「クランクシャフト」。エンジンのピストン運動を回転運動に変換する重要保安部品。上はスポーツカー用、下はオートバイ用。円柱形の部材から削り出す特注製品

素材から製品まで一貫製造



高速回転検査。実際の使用時と同じ高速で回転させ、軸のブレを修正する



焼き入れ



熱処理後の検査。資格保持者(2級金属熱処理技能士)による検査・認証を行う



自社の戦略を語る湯浅会長

下請の自動車部品製造で伸び、完成品への転換を目指す

建設機械やエレベーター、ジャッキなど、油圧シリンダーは多様な場面で使われている。油圧技術の応用で、信頼性の高い伸び縮みするポール（棒）もできる。このような事業展開に挑んでいるのが、岡山市で創業70周年を迎えるユアサ工機（湯浅博文社長）だ。

湯浅社長の祖父和夫氏が1947（昭和22）年に設立した東洋自動車工業（83年に現社名に改称）は、エンジンの再生・修理から出発した。当時、岡山では自動車用など各種エンジンが多く作られていたが、摩耗による故障も多かったのである。その仕事の過程で、エンジンのシリン

ダーやクランクシャフト（ピストンの往復運動を回転運動に変換する部品）などの製造に取り組むようになった。その技術力が評価され、大手メーカーからも受注して業容を拡大、70年頃から部品製造に特化した。

しかし、オイルショック不況を経験した79年に社長に就任した信夫氏（現会長）は、下請から脱皮して付加価値重視の経営に転換することを決断。ミクロン単位の高精度の加工技術を生かして、クランクシャフトは開発・試作、あるいは性能への要求がシビアなレース用などの少量の高付加価値品に特化した。

「特殊部品なので、必要な設備を揃えているところは少なく、新規参入も難しい。一貫生産で短納期も実現しているので、競合相手はごくわ

ずかだ。また、精度向上のため、製造用の機械に独自の工夫をこらしている」（湯浅会長）

クランクシャフトは、今も同社の主力製品だ。

油圧シリンダーの応用で伸縮ポールシステムを開発

油圧シリンダーも、創業以来の技術の蓄積があり、同社の技術力が世界各国で認められている分野だ。1980年には専用工場を造り、長尺の多段伸縮シリンダーなど特殊なニーズに対応できる体制が整っている。その延長で94年に開発に成功したのが伸縮ポールシステムだ。クレーン車などに使う油圧シリンダーの応用で、抜群の強度や安定性、正確性、軽量性を実現。アンテナやカメラを

取り付けた中継車や通信の移動基地局、災害など緊急時の照明など、放送、通信、交通、消防、警察、あるいはアミューズメント施設といった公共性の高い分野で使われ、国内の中継車では99%のシェアを誇る。

今後、オリンピック関連の中継機材などで需要が高まることが期待される。新たな用途開発で、販路拡大も狙う。同社の将来の主力となる製品として、期待がかかる。

「丸くて長い」ものの加工を得意分野として、わが社にしかできない仕事を一つ見つけることで、活路を見いだしてきた。今後、小型プロペラ機のクランクシャフトを狙っており、許認可を取ろうとしている」と湯浅会長。新しいものを創造するチャレンジは続く。

撮影＝山口 隆 文＝島野 紀

伸縮ポールで部品メーカーから完成品メーカーへ飛躍



伸縮ポールシステムの使用例。中継車の屋根から伸びる送信アンテナに使われている（同社提供）